

ローレンツィーニのリュート曲研究

著者名(日)	坂崎 則子
雑誌名	研究紀要
巻	14
ページ	1-41
発行年	1990
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00000707/



ローレンツィーニのリュート曲研究

坂 崎 則 子

1. はじめに

16世紀から17世紀初頭にかけて、リュート音楽は発展していった。多声の声楽曲全盛期であった当時、伴奏など声楽の補助的役割ばかりでなく、声楽曲の編曲や舞曲、前奏曲やリチェルカーレ、ファンタジアなどがリュート音楽の主なリパートリーであった。特に舞曲やリチェルカーレ、ファンタジアなどは、はじめから器楽曲として構想された楽曲であり、当時のこうしたジャンルをリュート音楽で辿って行くことで、その発展過程が明らかになっていくことと思われる。16世紀初頭にイタリアでペトルッチ Petrucci がリュート曲（全6巻）を出版した。この曲集の中にもリチェルカーレや前奏曲の初期形態のような器楽曲が数多く含まれている。

（注1） ペトルッチ以降、フランチェスコ・ダ・ミラノ Francesco da Milano, ヴィンチェンツォ・カピローラ Vincenzo Capilora などの手を経て、器楽曲としてリュート音楽が開拓され、初期の単純な楽曲からより複雑で手の込んだ書法による楽曲へと変貌を遂げていったのであった。ダ・ミラノやカピローラの曲はリュート・タブラチュアから5線譜に転写したものが出版されているが（注2）、その他多くの作曲家達による楽曲は未だにリュート・タブラチュアのままである。これから数多くのリュート・タブラチュアが5線譜に転写され分析研究されていけば、ルネサンスからバロックにかけてのリュート音楽の歩みがより一層明確になっていくであろう。1986年の当紀要において、筆者はカピローラのリチェルカーレを扱った。（注3）これをはじめとして、タブラチュアの転写を通して他の様々なリュート音楽を研究していくというのが筆者の目標である。

2. ローレンツィーニのリュート曲

本稿で取り上げるのは、イタリアのローレンツィーニのリュート曲である。ローレンツィーニの名は様々な表記法で示されている。（注4）

Lorenzini del Liuto

Laurencini

Laurenzini

Laurencinus Romanus

Eques Romanus

Eques Auratus Romanus etc.

ローレンツィーニは、活躍した時期が16世紀の終わり頃で、その名は広く流布していたにも拘らず、フル・ネームは判明していない。また上記のごとく多種多様な表記法で書かれているため、少々混乱を招いている。(注5) 経歴で判明していることは断片的で、1570-71年、エステ家のイッポリート枢機卿に仕え、彼の卓越したリュートに関する知識に対して、教皇から騎士の称号を与えられた。1603年にケルンで出版された《調和の宝庫 Thesaurus Harmonicus》の編集者ジャン・バティスト・ブザール Jean Baptiste Besard (c.1567-1625?) は、ローレンツィーニに師事したと伝えられている。(注6) この曲集は、当時の主要なリュートのレパートリーを網羅していると同時に、リュート奏法に関する記述も含んでいることで歴史的に見逃すことの出来ない資料である。この曲集の標題のはじめに、“Thesaurus Harmonicus Divini Laurencini Romani……”という記述があることから、ブザールがこれを編集する際、彼の師ローレンツィーニの曲集となることも意図していたことがうかがわれる。(注7) この曲集自体は大変膨大なもので、400曲にものぼるリュート曲が収められているが、その中にローレンツィーニの曲は43曲入っている。その内訳は、プレルーディウム21曲、ファンタジア9曲、ガリアルダ9曲、パッサメッツォ3曲、ブランル1曲である。その規模、多彩なレパートリー、また当時のリュート奏法に関する章など、残存する資料の中では最大の規模であるこの《調和の宝庫》を通して、ローレンツィーニのリュート音楽が伝えられているのは意義深いものがある。

ブザールの曲集はローレンツィーニの曲を最も多く収録しているが、この曲集の他にもローレンツィーニの曲を載せている資料を列挙してみよう。

Hainhofer Lute Manuscript, 1603, Bibliothek Herzog August, Wolfenbüttel.

Testudo Gallo-Germanica, by Fuhrmann, Nürnberg, 1615. (注8)

Lord Edward of Cherbury's Lute Book, 1640, Fitzwilliam Museum, Cambridge.

Novus Partus, ed. by Besard, Augsburg, 1617.

Manuscript, Leipzig II.6.15., 1619.

上記のようにドイツにおける資料が多いことから、ローレンツィーニはその生涯のある時期をドイツで過ごした可能性が高いのであるが、他の資料が現在のところ見つからないので確証できない。様々な手稿譜や、当時の出版譜などが将来もっと解明されていけば、あるいは彼についての情報が増えるかもしれないが、現時点ではブザールの《調和の宝庫》を主な拠り所にしていくしかない。

《調和の……》もそうであるが、当時の曲集は概して国際的レパートリーから成っており、出版された時点における一般の音楽上の趣向を反映している。特にリュート音楽は先にも述べた通り、ミサ、モテット、民謡といった声楽曲で既成楽曲の編曲、伴奏用舞曲、鑑賞用舞曲、前奏曲、リチュエルカーレ、ファンタジアなど、当時の音楽のあらゆる様相を映し出すものとして捉えられる。

3. ローレンツィーニのリュート・タブラチュア

この小論で扱うのは、1978年にイギリスのリュート協会が出版したローレンツィーニのリュート・タブラチュアである。(注9) この出版物では、ローレンツィーニの曲が調性毎にまとめられており、かならずしももとのブザールの収録順とは一致していない。これはあくまでも演奏者の便宜をはかったためということで、あまり深い意図があるわけではない。(注10) 5線譜であれば調性は一目瞭然であるから、曲の配列に関してはジャンル別など、もう少し別の観点でなされるのかも知れない。しかし、リュート・タブラチュアは弾いてみなければ曲の全体はわからないので、調性別にまとめられることになったのであろう。今回はこの出版物の意図をそのまま生かした形で転写を行ったが、この曲集で取りあげられている楽曲は次のとおりである。

Praeludium (プルレーディウム) 14曲

Fantasia (ファンタジア) 5曲

Galliarda (ガリアルダ) 6曲

Pass'e mezo (パッサメッツォ) 2曲

Branle (ブランル) 1曲

Courante (クーラント) 1曲

歌曲編曲 (Susanne un jour) 1曲

以上のような内容で全30曲が選ばれている。このうちクーラントだけがブザール以外の出典で、リズム記号が音符になっている。(注11) タブラチュアの書式はフランス式で、ほとんど全部の曲が7コースのリュート用に書かれている。(注12)

楽曲の種類別にみると、プルレーディウムが14曲で他のどのジャンルよりも多い。プルレーディウム以外の曲は1曲から6曲までとなっている。楽曲ジャンル別に調性と小節数を列挙してみよう。なお、本稿では調性、音名はドイツ語表記に統一してある。

[プルレーディウム]

- | | | | |
|-----------------------------|--------|------|-------------|
| 1. Praeludium Laurencini | g-moll | 15小節 | Besard f.1v |
| 2. Praelud(dium) Laurencini | g-moll | 10小節 | Besard f.2 |

3. Praelud(ium) Laurenc(ini)	G-Dur	11小節	Besard f.2v
4. Praelud(ium) Eiusdem	G-Dur	15小節	Besard f.2v
5. Praelud(ium) Laurenc(ini)	(d-moll)	15小節	Besard f.3 (注13)
12. Prael(udium) Laurenc(ini)	(d-moll)	16小節	Besard f.12
13. Prael(udium) Laurenc(ini)	(d-moll)	25小節	Besard f.11
14. Prael(udium) Laurenc(ini)	(d-moll)	14小節	Besard f.12
17. Prael(udium) Laurenc(ini)	f-moll	19小節	Besard f.6v
18. Prael(udium) Laurenc(ini)	F-Dur	28小節	Besard f.7
19. Praelu(ium) Laurenc(ini)	f-moll	31小節	Besard f.8v
24. Prael(udium) Laurenc(ini)	F-Dur	16小節	Besard f.9
25. Prael(udium) Laurenc(ini)	b-moll	18小節	Besard f.12v
26. Prael(udium) Laurenc(ini)	b-moll	12小節	Besard f.2v

[ファンタジア]

6. Fantasia Laurencini	G-Dur	30小節	Besard f.13v
7. Fantasia Laurenc(ini)	G-Dur	37小節	Besard f.14
20. Fantasia Laurenc(ini)	F-Dur	46小節	Besard f.18v
21. Fantasia Laurenc(ini)	F-Dur	28小節	Besard f.19
22. Fantasia Laurenc(ini)	F-Dur	19小節	Besard f.20

[ガリアルダ]

10. Galliarda Laurencini	G-Dur	26小節	Besard f.126v
15. Galliarda Laurencini	(d-moll)	13小節	Besard f.121
16. Galliarda Laurencini	(C-Dur)	18小節	Besard f.125v
28. Galliarda Laurenc(ini)	b-moll	23小節	Besard f.117
29. Galliarda Laurencini	b-moll	15小節	Besard f.124v
30. Galliarda Laurencini	b-moll	14小節	Besard f.124v

[パッサメッツォ]

9. Pass'e mezo Laurencini	g-moll	32小節	Besard f.83v
27. Pass'e mezo Laurencini	b-moll	49小節	Besard f.101v

[ブランル]

11. Branle de Laurencin(i)	(g-moll)	36小節	Besard f.140v
----------------------------	----------	------	---------------

[クーラント]

23. Courante 12. Laurentzini F-Dur 88小節 Fuhrmenn p.169

[歌曲編曲]

8. Susanne un jour (Lassus)

Transpositio Laurenini g-moll 58小節 Besard f.57v

それぞれの曲を5線譜に転写していく場合，なるべくその楽曲の全体の姿とでもいうべき響きが分りやすいように配慮した。しかし鍵盤楽器やアンサンブルと異なり，リュートで多声の曲を作る場合，最後まで多声書法を完全に通すことが難しく，スティル・ブリゼなど何らかの工夫を施すことによって多声を暗示したりすることも多い。従って，転写の際には主に模倣に注意したり，音価もその音がどの弦で弾かれているのかを考慮して決定した。

style brisé

16. Galliarda



模倣

22. Fantasia



4. ジャンル別概観

主にブザールの曲集に収められているローレンツィーニの作品を概観してみる際、最も曲数の多いプレルーディウム、次にファンタジア、そして舞曲としてガリアルダ、パッサメッツォ、ブランル、クーラントをまとめて扱うことにした。

[プレルーディウム]

・曲の規模

12小節から31小節まで、この時期のリュート用のプレルーディウムとしては中規模と言える。短い曲は装飾的な音階的な動きを中心とする指馴らしとしての性格をもち、長めの曲はかなり綿密な対位法が取られている。多声の曲をリュートで弾くときには、3声が普通であるが、1番と17番は4声で書かれている。ただし、厳密に4声を貫くのはリュートでは至難の技であるため、ごく短い主題や、音型を4つの声部の音域で次々に模倣してみせることで4声書法を暗示するように工夫している。

・調性、終止

先に挙げた表で、全15曲中3分の2以上が短調となっている。ただし、注13でも述べた通り（ ）付きの短調は旋法的な響きがかなり残っているもので、プレルーディウムにおいては（d-moll）と分類したものはすべてドリア旋法が支配的で、この旋法とd-mollとが混在した響きとなっている。特に14番は曲の最後になってようやくbの音が出現する。

また転調が頻繁に行なわれているが、まだ調性音楽の語法が確立していないために、調性音楽の響きになれた今の捉え方でみると唐突な感じがする。しかしリュートという楽器は撥弦楽器で、しかも音量音質ともにまろやかであるため、実際には現代の楽器で弾いたときほど耳障りではない。また、対斜も時折きかれるが、これもまだ調性音楽の発展段階にあった時代の曲に特有の現象である。（注14）

曲の終わりの部分については一応短調に分類した曲はすべてピカルディ終止であり、また、全体的にIV—I進行、あるいは下屬調から主調に終止する傾向がみられた。

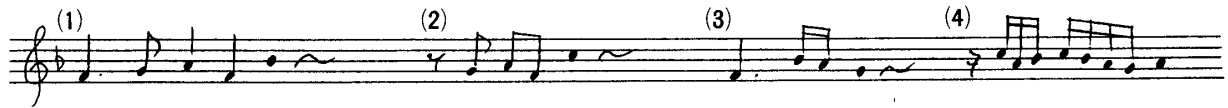
[ファンタジア]

・規模と書法

全体のなかでは比較的長めの曲が多い。すべて長調で書かれており、模倣が中心的書法で、どの曲も付点リズムの音型が模倣されていく。模倣される音型が複数あるものがほとんどで、20番は4種類の音型が模倣される。（下の譜例参照）ここで「主題」といわずに「音型」とし

たのは、なによりも曲の規模がそれほど大きいわけではないので、模倣が相当重なり合ってストレッタ風に行なわれることが殆どで、そのため主題と言えるほどのまとまりをもてないでいるためである。

第20番の4種類の主題



・調性、終止

プレルーディウムでみられたような頻繁な転調はない。長調の曲だけということもあって、旋法的な響きはあまり感じられないが、それでも転調の時には一過性の不完全な変わり方をする。(20, 21番) 楽曲終止は7番と21番がV—Iで、あとはプレルーディウムでも多くみられたIV—I進行であった。また、曲の締めくくり方に2種類あって、6, 7, 21番のように装飾的な音階の上下行で終るものと、20, 22番のように和音の連打で終るものとがみられた。

[舞曲]

・ガリアルダ

舞曲の様式でかかれたものとしては、このガリアルダが最も多い。殆どが短調であるが、他の曲種と同じく曲の最後はピカルディ終止となっている。変わっているのは曲の主調で終止しない曲があることで、10番 (G-Dur) はD-DurのV—Iで、また16番 (C-Dur) はA-DurのV—Iで終止する。

舞曲の様式なので模倣よりもリズムを明確に刻む傾向があることは確かである。そしてこの和弦リズムによって、調も変化していく。4音を同時に打弦する和音ばかりでなく、かなり装飾的な音階も織り込まれていて技術を要する。ローレンツィーニのガリアルダは、ルネサンス時代の一般的なガリアルドのように3部分構造はもはやみられない。しかし時折カデンツでかなりはっきりと区切りをつけているような所に、もとの部分構造の名残が感じられる。

・パッサメッツォ

2曲とも低音旋律定型、パッサメッツォ・アンティーコに基づく変奏曲形式をとる。そしてそれぞれの低音を主音とする調性が割りあてられていくのであるが、その流れを図示してみよう。アルファベットの太文字は長調、小文字は短調の響きになっていることを表わす。

9番 (g-moll) : g:—F:—g:—D:—B:—F:—g: (第2変奏まで)

27番 (b-moll) : b:—As:—b:—f:—Des:—As:—b:—F:—B: (第3変奏まで)

9番は第1、第2変奏とも曲尾に行くに従って音価が細かくなっていく傾向がある。また第2変奏に入ると、分散和音の動きが主体となり、これが模倣されるような技法が見られる。27番の方は技術的には難しい曲で、第2、第3変奏に進むにつれて装飾的音階が次第に多くなっていく。9番とは異なって模倣は見られないが、6度の平行進行をはじめとして多声の中の2声が多様な絡み方をするように書かれている。

低音旋律定型が楽曲の流れを規定しているため、調が極めて強引に変わっていく。特に27番の曲で、第3変奏に入ってますます華麗な変奏が繰りひろげられようとするときに、鋭い対斜が聞かれたりする。(35、38小節)

このような伝統的な低音旋律定型がまだ用いられて、考えられ得る装飾的旋律が次々に出現するのだが、最早その生命力のようなものは弱まってきている。

・ブランル

比較的低い音域の曲で、拍を刻む低音に対して上声がうねるように動いていく。低音はほとんどG、F、Bの音を主軸として、これらの音を持続低音のように長めにおさえていく。36小節で、ローレンツィーニの曲としては長めであるが、音域も音型も殆ど変化がない。ブランルという舞曲はからだを左右に揺らしながら回っていくものであるが、その動作に合うように、この曲も8分音域や16分音符の流れが規則正しく流れていく。鑑賞用に様式化されたものというより、実際の踊りの伴奏にこのまま使えそうな曲といえる。

・クーラント

この曲のみブザール以外の出典であることもあって、88小節と規模が最も大きく、また作曲様式もかなり異質な感じがする。それは長い曲であっても全体があまりに単純な書法で、T—S—D—Tの流れが中心となっており、時折和音を弾く以外は2声で働いていく。旋律も上声の方が細かく動き、ごくあたりまえの旋律断片を反復進行していくだけの曲である。

この30曲を見る限りこの曲は全く別な様相を呈している。何分にもローレンツィーニに関する資料が少ないので今回は確証できないが、このフルマンによって伝えられた曲については今後の課題としておきたい。

[歌曲編曲]

ブザールによる曲集に入っているローレンツィーニの曲で歌曲編曲はこの曲のみである。これはG.ゲルー Guillaume Gueroult の詩にラッススが1560年に作曲した《ある日のスザンナ Susanne un jour》で、当時大変人気のあったシャンソンであり、多くの器楽用編曲がある。ローレンツィーニは原曲の旋律を音高もリズムもなるべく忠実に最上声に置いている。原曲のシャンソンは5声であるが、これはほぼ3声で、両外声が装飾的パッセージを担当している。

転調は頻繁であるが、カデンツによって手順を踏みながら転調するというよりは、音階を上下行しながら調性に移り変わっていく。この装飾的音階は、かなり多様な動きをするが、曲の最後に近づくにつれて模倣されたり、かなり広い音域を上下行して最後にピカルディ終止となって締めくくる。

5. おわりに

16世紀から17世紀にかけてのリュート曲は特に器楽曲としての様式の発展が著しい。16世紀初期のスピナチーノ Francesco Spinacino のリチェルカーレは全体に短くて、独立した楽曲というより何か別の曲の前に指馴らしとして弾くものが殆どであった。16世紀中期のカピローラやダ・ミラノのリチェルカーレは模倣やリュート独特のパッセージ、装飾が次第に確立されて、楽曲としての密度が高くなっていく。ローレンツィーニはこうした流れの中では後期に属するが、この30曲を見るかぎりでも彼自身相当な演奏技術をもっていたことをうかがわせる。

彼のプレルーディウムとファンタジアは独立楽曲としての地位を既に獲得している。舞曲に関しては、ブザールの曲集にはガリアルドは別としても例が少ないが、あまりきっちりした構造をもっていない。拍を刻むという舞曲に不可欠の特徴は依然として備えてはいるものの、その舞曲本来の構造的な特徴は後退してしまっている。

全体的にみて演奏するのはかなり難しいが、プレルーディウム、ファンタジアのようなジャンルに関しては書法が定まりつつあるが、17世紀へと時代が移っていくに従って、ルネサンスに流行した舞曲が、ローレンツィーニにとってはもはや衰退しつつあるものとなっている。

今後の課題としては、ブザールの曲集を概観して当時のリュート音楽の様相を探り、またブザールが師ローレンツィーニからどのような影響を受けているのか、その他の作曲家との相互影響などについて研究していきたいと考えている。

(本学講師＝西洋音楽史担当)

1. Praeludium Laurencini

Besard f.1v

2. Praelud(ium) Laurencini

Besard f.2

3. Praelud(ium) Laurenc(ini)

Besard f.2v

Handwritten musical score for Praelud(ium) Laurenc(ini). The score is written on two staves, with the right staff featuring a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The left staff has a bass clef. The music consists of several measures, including a prominent sixteenth-note run in the right hand. A circled '1' is visible at the bottom of the first system. The score ends with a circled '1' at the bottom right.

4. Praelud(ium) Eiusdem

Besard f.2v

Handwritten musical score for Praelud(ium) Eiusdem. The score is written on two staves, with the right staff featuring a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The left staff has a bass clef. The music consists of several measures, including a prominent sixteenth-note run in the right hand. A circled '1' is visible at the bottom of the first system. The score ends with a circled '1' at the bottom right.

5. Praelud(ium) Laurenc(ini)

Beard f.3

Measures 1-12 of the musical score. The notation includes a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a common time signature (C). The melody is written on a single staff, and the bass line is indicated by a series of notes on a lower staff. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines.

Measures 13-24 of the musical score. The notation continues from the previous system, showing the progression of the melody and the bass line. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines.

Measures 25-36 of the musical score. The notation continues from the previous system, showing the progression of the melody and the bass line. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines.

Measures 37-48 of the musical score. The notation continues from the previous system, showing the progression of the melody and the bass line. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines.

Measures 49-60 of the musical score. The notation continues from the previous system, showing the progression of the melody and the bass line. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines.

6. Fantasia Laurencini

Besard f.13v

The musical score for Fantasia Laurencini is presented in a multi-staff format. The top staff contains the main melodic line, while the lower staves provide harmonic support through figured bass and other instrumental parts. The score is divided into measures, with some measures containing multiple notes or rests. The notation includes various musical symbols such as clefs, key signatures, and dynamic markings. The overall structure of the piece is complex, with many measures and a high density of musical notation.

16

17

18

20

21

22

23

24

25

26

27

28

28

29

30

7. Fantasia Laurenc(ini)

Besard f.14

8. Susanne un jour (Lassus) *Transpositio Laurencini* Besard f.57v

First system of the musical score, measures 1-4. The vocal line (treble clef) begins with a whole note 'a' on a G line, followed by a half note 'a' on a G line, and then a quarter note 'a' on a G line. The lute line (bass clef) provides a rhythmic accompaniment with eighth and sixteenth notes. Measure 4 contains a repeat sign.

Second system of the musical score, measures 5-8. The vocal line continues with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 8 contains a repeat sign.

Third system of the musical score, measures 9-12. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 12 contains a repeat sign.

Fourth system of the musical score, measures 13-16. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 16 contains a repeat sign.

Fifth system of the musical score, measures 17-20. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 20 contains a repeat sign.

Sixth system of the musical score, measures 21-24. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 24 contains a repeat sign.

Seventh system of the musical score, measures 25-28. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 28 contains a repeat sign.

Eighth system of the musical score, measures 29-32. The vocal line begins with a half note 'a' on a G line, followed by a quarter note 'a' on a G line, and then a half note 'a' on a G line. The lute line continues with its rhythmic accompaniment. Measure 32 contains a repeat sign.

40 49

⑦

50 59

⑧

60 69

⑨

70 79

⑩

80 89

⑪

90 99

⑫

100 109

⑬

110 119

⑭

9. Pass'e mezo Laurencini in G sol re ut per b molle Besard f.83v

Measures 54-56 of the musical score. The notation is in G major (one sharp) and 3/4 time. It features a treble and bass staff with various musical notations including notes, rests, and dynamic markings like 'f' (forte) and 'p' (piano). Measure 56 includes a circled '11'.

Measures 57-59 of the musical score. The notation continues with treble and bass staves. Measure 59 includes a circled '12'.

Measures 60-62 of the musical score. The notation continues with treble and bass staves. Measure 62 includes a circled '13'.

Measures 63-65 of the musical score. The notation continues with treble and bass staves. Measure 65 includes a circled '14'.

Measures 66-68 of the musical score. The notation continues with treble and bass staves. Measure 68 includes a circled '15'.

Measures 69-71 of the musical score. The notation continues with treble and bass staves. Measure 71 includes a circled '16'.

10. Galliarda Laurencini

Besard f.126v

First system of musical notation, measures 1-4. The music is in 3/4 time with a key signature of one sharp (F#). It features a treble clef and a common time signature. The notation includes various rhythmic values and accidentals.

Second system of musical notation, measures 5-8. The music continues with similar rhythmic patterns and accidentals. A measure rest is present in the second measure of this system.

Third system of musical notation, measures 9-12. The notation includes a measure rest in the first measure and continues with complex rhythmic figures.

Fourth system of musical notation, measures 13-16. The system concludes with a final cadence and a circled '1' at the end of the staff.

First system of musical notation, measures 17-20. This system includes a measure rest in the first measure and a section labeled 'Secunda parte' in the second measure.

Second system of musical notation, measures 21-24. The notation continues with complex rhythmic patterns and accidentals.

Third system of musical notation, measures 25-28. The system includes a measure rest in the first measure and continues with complex rhythmic figures.

Fourth system of musical notation, measures 29-32. The system concludes with a final cadence and a circled '1' at the end of the staff.

12

15

18

21

23

11. Branle de Laurencin(i)

Besard f.140v

12. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.12

27

27

30

30

33

33

38

38

41

41

45

45

49

49

13. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.11

Measures 1-12 of the musical score. The notation includes a treble clef, a key signature of one flat (B-flat), and a common time signature (C). The melody is written on a single staff, and the bass line is indicated by a large bracket on the left. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines. A circled number 13 is at the beginning of the first measure.

Measures 13-24 of the musical score. The notation continues from the previous system, showing a continuation of the melody and bass line. A circled number 14 is at the beginning of the first measure of this system.

Measures 25-36 of the musical score. The notation continues, showing a continuation of the melody and bass line. A circled number 15 is at the beginning of the first measure of this system.

Measures 37-48 of the musical score. The notation continues, showing a continuation of the melody and bass line. A circled number 16 is at the beginning of the first measure of this system.

Measures 49-60 of the musical score. The notation continues, showing a continuation of the melody and bass line. A circled number 17 is at the beginning of the first measure of this system.

14. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.12

System 13-15: Treble and bass staves. Treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C). The music features a melody with eighth and sixteenth notes, and a bass line with a steady eighth-note accompaniment. A repeat sign is present at the end of the system.

System 16-18: Treble and bass staves. The melody continues with various rhythmic patterns, including dotted rhythms and sixteenth-note runs. The bass line remains consistent with the eighth-note accompaniment.

System 19-21: Treble and bass staves. The melody features a series of sixteenth-note runs. The bass line continues with the eighth-note accompaniment. A repeat sign is present at the end of the system.

System 22-24: Treble and bass staves. The melody concludes with a final cadence. The bass line continues with the eighth-note accompaniment. A repeat sign is present at the end of the system.

System 1-5: Treble and bass staves. The music begins with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C). The melody starts with a series of eighth notes, followed by a more complex rhythmic pattern. The bass line provides a steady eighth-note accompaniment.

System 6-10: Treble and bass staves. The melody continues with various rhythmic patterns, including dotted rhythms and sixteenth-note runs. The bass line remains consistent with the eighth-note accompaniment. A repeat sign is present at the end of the system.

System 11-15: Treble and bass staves. The melody features a series of sixteenth-note runs. The bass line continues with the eighth-note accompaniment. A repeat sign is present at the end of the system.

15. Galliarda Laurencini

Besard f.121

3/4

3

4

6

8

10

16. Galliarda Laurencini

Besard f.125v

3/4

3

4

6

8

10

17. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard 16v

18. Praeludium Laurenc(ini)

Besard f 7

Measures 14-16 of the Praeludium Laurenc(ini). The score is written for a single melodic line on a five-line staff. Measure 14 begins with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of eighth and sixteenth notes. Measure 15 continues the melodic line. Measure 16 ends with a double bar line. The notation includes various accidentals (sharps, flats, naturals) and rests.

Measures 17-19 of the Praeludium Laurenc(ini). The score continues on a single melodic line. Measure 17 starts with a treble clef and a key signature of one flat. The melody features a mix of eighth and sixteenth notes. Measure 18 continues the melodic development. Measure 19 concludes the section with a double bar line. The notation includes various accidentals and rests.

Measures 1-3 of the Praeludium Laurenc(ini). The score is written for a single melodic line on a five-line staff. Measure 1 begins with a treble clef and a key signature of one flat. The melody consists of eighth and sixteenth notes. Measure 2 continues the melodic line. Measure 3 ends with a double bar line. The notation includes various accidentals and rests.

Measures 4-6 of the Praeludium Laurenc(ini). The score continues on a single melodic line. Measure 4 starts with a treble clef and a key signature of one flat. The melody features a mix of eighth and sixteenth notes. Measure 5 continues the melodic development. Measure 6 concludes the section with a double bar line. The notation includes various accidentals and rests.

Measures 7-9 of the Praeludium Laurenc(ini). The score continues on a single melodic line. Measure 7 starts with a treble clef and a key signature of one flat. The melody features a mix of eighth and sixteenth notes. Measure 8 continues the melodic development. Measure 9 concludes the section with a double bar line. The notation includes various accidentals and rests.

Measures 10-12 of the Praeludium Laurenc(ini). The score continues on a single melodic line. Measure 10 starts with a treble clef and a key signature of one flat. The melody features a mix of eighth and sixteenth notes. Measure 11 continues the melodic development. Measure 12 concludes the section with a double bar line. The notation includes various accidentals and rests.

19. Praelud(ium) Laurenc(ini)

Beard f.8v

Measures 1-5 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The score is written for a single melodic line on a five-line staff. The key signature has one flat (B-flat). The time signature is common time (C). The notation includes various note values (minims, crotchets, quavers) and rests. A circled '1' is placed below the staff at measure 4.

Measures 6-10 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '5' is placed below the staff at measure 6.

Measures 11-15 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '8' is placed below the staff at measure 11.

Measures 16-20 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '11' is placed below the staff at measure 16.

Measures 21-25 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '16' is placed below the staff at measure 21.

Measures 26-30 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '18' is placed below the staff at measure 26.

Measures 31-35 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '22' is placed below the staff at measure 31.

Measures 36-40 of the Praelud(ium) Laurenc(ini). The notation continues with various note values and rests. A circled '25' is placed below the staff at measure 36.

Handwritten musical score system 28. It features a grand staff with a treble and bass clef on the left, and a single staff on the right. The music is in 4/4 time. The right staff contains a series of notes with stems, some marked with 'p' (piano) and 'f' (forte). There are also some markings that look like 'a' and 'b'.

Handwritten musical score system 14. It features a grand staff with a treble and bass clef on the left, and a single staff on the right. The music is in 4/4 time. The right staff contains a series of notes with stems, some marked with 'p' (piano) and 'f' (forte). There are also some markings that look like 'a' and 'b'.

Handwritten musical score system 17. It features a grand staff with a treble and bass clef on the left, and a single staff on the right. The music is in 4/4 time. The right staff contains a series of notes with stems, some marked with 'p' (piano) and 'f' (forte). There are also some markings that look like 'a' and 'b'.

Handwritten musical score system 21. It features a grand staff with a treble and bass clef on the left, and a single staff on the right. The music is in 4/4 time. The right staff contains a series of notes with stems, some marked with 'p' (piano) and 'f' (forte). There are also some markings that look like 'a' and 'b'.

Handwritten musical score system 25. It features a grand staff with a treble and bass clef on the left, and a single staff on the right. The music is in 4/4 time. The right staff contains a series of notes with stems, some marked with 'p' (piano) and 'f' (forte). There are also some markings that look like 'a' and 'b'.

20. Fantasia Laurenc(ini)

Beard f.18v

21. Fantasia Laurenc(ini)

Beard f.19

36 37 38 39 40

41 42 43 44 45

46 47 48 49 50

51 52 53 54 55

56 57 58 59 60

61 62 63 64 65

66 67 68 69 70

71 72 73 74 75

22. Fantasia Laurenc(ini)

Besard f.20

21

24

25

28

29

32

33

36

37

40

23. Courante 12. Laurentzini

Fuhrmann p.169

24. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.9

[illegible]

Handwritten musical score for "The Rose Tree" in G major. The score is written on two staves: a treble staff (top) and a bass staff (bottom). The key signature is one sharp (F#), and the time signature is 4/4. The melody is written in the treble staff, and the bass line is in the bass staff. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines. The piece is marked with a "13" in the bottom left corner.

81

8 9

A handwritten musical score for the song "The Rose Tree". The score is written on ten staves, organized into two systems of five staves each. The first system (staves 1-5) contains the vocal melody and a piano accompaniment. The second system (staves 6-10) contains the piano accompaniment and a vocal melody. The music is written in a simple, handwritten style. The first system starts with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). The second system starts with a bass clef and a key signature of one flat (B-flat). The lyrics "The Rose Tree" are written below the staves. The score includes various musical notations such as notes, rests, and bar lines. There are also some handwritten annotations, including "C" and "B" at the beginning of the first system, and "III" and "II" at the beginning of the second system.

[illegible][illegible]

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

25. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.12v

1

5

9

14

11

13

15

26. Prael(udium) Laurenc(ini)

Besard f.12v

27. Pass'e mezo Laurencini

Besard f.101v

22 23 24

31 Tercia pars 32 33

34 Tercia pars 35 36

37 Tercia pars 38 39

20 Secunda pars 21

22 Secunda pars 23 24

25 Secunda pars 26 27

28 Secunda pars 29 30

28. Galliarda Laurenc(ini)

Besard f.117

39

39 40 41

42

42 43 44

45

45 46 47

48

48 49 50

1

1 2 3

4

4 5 6

7

7 8 9

10

10 11 12

29. Galliarda Laurencini

Besard f.124v

Handwritten musical notation for measures 12-14. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). Measure 12 starts with a 12-measure rest. The melody consists of eighth and sixteenth notes. Measure 14 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 15-17. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 15 starts with a 15-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 17 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 18-20. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 18 starts with an 18-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 20 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 21-23. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 21 starts with a 21-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 23 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 1-3. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 1 starts with a 3/4 time signature. The melody consists of eighth and sixteenth notes. Measure 3 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 4-6. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 4 starts with a 5-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 6 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 7-9. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 7 starts with an 8-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 9 ends with a repeat sign.

Handwritten musical notation for measures 10-12. The notation is on a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. Measure 10 starts with a 13-measure rest. The melody continues with eighth and sixteenth notes. Measure 12 ends with a repeat sign.

30. Galliarda Laurencini

Besard f124v

注

- (1) Francesco Spinacino, “Intabolatura de Lauto”, Libro I. Venezia 1507.
“Intabolatura de Lauto”, Libro II. Venezia 1507.
Joan Ambrosio Dalza, “Intabolatura de Lauto”, Libro Quatro, Padoane diversi, Calate a la spagnola...Frottole”, Venezia 1508.
- (2) The Lute Music of Francesco Canova da Milano (1497-1543), Edited by Arthur J. Ness. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970.
Compositione de Meser Vincenzo Capilora (1571), Edited by O.Gombosi. Neuilly-sur-Seine: Société de Musique D'Autrefois, 1955.
- (3) 東京音楽大学「研究紀要 第11」P.1-25
- (4) Grove, vol.11, 234-235. プザールの曲集では Laurencini と表記されているので、これに従えば「ラウレンチーニ」となる。しかし、この小論においては作曲者の出身イタリアの原語の Lorenzini 「ローレンツィーニ」という表記を採用している。
- (5) プザールBesardの《Thesaurus harmonicus》において、Laurencinus Romanus Eques Auratus Romanus の2つの名称が同一人物なのか、別人なのか不明のままである。
- (6) Facsimile edition, Minkoff, Geneva, 1975.
- (7) Thirty Pieces for Lute by Laurencini, ed. by Tim Crawford, The Lute Society Music Editions, London, 1979
- (8) Facsimile edition by Junghänel-Päffgen-Schäffer, Neuss/Rhein, 1975.
- (9) 前掲書(6), (7).
- (10) 前掲書(7), p.30.
- (11) Georg Leopold Fuhrmann, Testudo Gallo-Germanica, Nürnberg, 1615.
- (12) フールマンの曲集から取られたクーラントのみ8コース用である。
- (13) 調性感はこの時期にはかなり確立していたとは言っても、まだ旋法性の残る曲もあり、その場合調性は()付きで表わした。
- (14) この時代のリュート音楽における対斜については次の文献でふれられている。
W.W.Newcomb, Studien zur englischen Lautenpraxis im elizabethanischen Zeitalter, Kassel 1967.